

# 1924年2月の日本共産党綱領草案

黒川 伊織

---

はじめに

- 1 前稿への補足 —— 「22年綱領草案」の起草時期をめぐって
- 2 本史料の概要
- 3 「1924年2月の日本共産党綱領草案」日本語訳

はじめに

本稿では、日本共産党ウラジオストク在外ビューローが起草した「1924年2月の日本共産党綱領草案」（原文英語，以下「24年2月綱領草案」とする）を，筆者による現代日本語訳によって紹介する<sup>①</sup>。また，前稿「日本共産党「22年綱領草案」問題再考」（『大原社会問題研究所雑誌』592号，2008年3月）で記した「22年綱領草案」の起草時期についても，前稿発表後に発見した史料にもとづく新たな見解を示したい。

## 1 前稿への補足 —— 「22年綱領草案」の起草時期をめぐって

前稿において筆者は，1923年6月に開催されたコミンテルン第三回拡大プレナムに提出された「1923年6月の日本共産党綱領草案」の存在を示し，それが同年3月開催の石神井臨時党大会で採択を討議した「日本共産党綱領草案」＝「22年綱領草案」と同一の文書であったことから，「1923年6月の日本共産党綱領草案」＝「22年綱領草案」であるとの結論を導き出した。そのうえで，「22年綱領草案」の作成時期を「1922年12月以降，1923年1月初頭まで」と推測したのだが，その後*Comintern archive, 1917-1940: Congresses, Plenums* (Leiden: IDC, 1994) に収録されているコミンテルン第四回大会関係文書に，「日本共産党綱領草案（1922年）」仏語版テキスト（PFACIII,

---

(1) 「24年2月綱領草案」の存在については，アジベーフ，石井規衛，富田武，横手慎二，和田春樹「資料目録 コミンテルンと日本共産党1917-1941」（『ソ連共産党，コミンテルンと日本，朝鮮』平成10年～平成11年度 科学研究費補助金基盤研究（B）(2) 研究成果報告書，研究代表者 石井規衛，2000年3月），30頁ですでに言及されているが，その内容についての紹介はなされていなかった。

ф.491, о.1, д.48, лл.1-34, 以下РГАСПИ, 491/1/48/1-34のように略記し, 本テキストは以下①とする) がふくまれていることを確認した。

①のテキストの前には「共産主義インタナショナル綱領草案」独語版・露語版(РГАСПИ, 491/1/28/1-52), 「アメリカ共産党綱領草案(1922年)」英語版(РГАСПИ, 491/1/32/1-18), 「ブルガリア共産党綱領草案(1922年)」露語版・独語版・英語版(РГАСПИ, 491/1/33/1-256), 「ドイツ共産党綱領草案(1922年10月7日)」独語版・仏語版(РГАСПИ, 491/1/35/1-205), 「イタリア共産党綱領草案(1922年11月15日)」仏語版・露語版・独語版(РГАСПИ, 491/1/38/1-25), 「中国社会主義青年同盟 [Китайской социалистической Лиги молодежи] 綱領・規約(1922年)」英語版・独語版(РГАСПИ, 491/1/45/1-30)などが収録されており, ①のテキストも第四回大会に提出されたと確言してよい。しかしながら, *Comintern archive*からは, 仏語版以外の「日本共産党綱領草案(1922年)」の存在は確認できなかった。

また, 前稿では触れえなかったが, 筆者が発見した「1923年6月の日本共産党綱領草案」=「22年綱領草案」の仏語版テキスト(РГАСПИ, 495/127/50/165-242)のうち165枚からはじまる奇数ナンバーの合計49枚は, 166枚からはじまる偶数ナンバーの合計49枚に手書きでの加筆訂正を行ったものであった。すなわち, 「22年綱領草案」の仏語版テキストには, 訂正前のテキスト(偶数ナンバー, 以下②aとする)と, 訂正後のテキスト(奇数ナンバー, 以下②bとする)がふくまれているということになる。なお, この②a・②bの異同点は表現上の語句の訂正にとどまり, 内容理解への影響をあたえるものではない。

①のテキストを, 上述の②a・②bの各テキストと比較したところ, 明らかな誤記をのぞき, 一般綱領部分・民族綱領部分ともに, ①のテキストと②bのテキストとは同一となっていた。また, ②a・②bと同じファイルに収録されているその露語版(РГАСПИ, 495/127/50/1-123), 英語版(РГАСПИ, 495/127/50/124-164)テキストも, ①=②bのテキストとほぼ同一であった<sup>(2)</sup>。すなわち, コミンテルン第四回大会(1922年11月)に提出された「日本共産党綱領草案」と, コミンテルン第三回拡大プレナム(1923年6月)に提出された「1923年6月の日本共産党綱領草案」=「22年綱領草案」は同一のものであり, したがって「22年綱領草案」はコミンテルン第四回大会に提出されたものであったと確定できる。

この①=②bのテキストの民族綱領部分を, 1924年に刊行された『綱領問題資料集』仏語版収録の「日本共産党綱領草案」<sup>(3)</sup>の当該部分と比較したところ, これも明らかな誤記をのぞいて同一となっていた。つまり, 『綱領問題資料集』仏語版収録の「日本共産党綱領草案」は, コミンテルン第四回大会に提出された「22年綱領草案」仏語版テキストを典拠としていたということになる。また, 前稿で指摘したように, 「22年綱領草案」には各国共産党に共通すべき一般綱領部分もふくまれており, その一般綱領部分(全6章)はブハーリン起草によりコミンテルン第四回大会に提出さ

(2) 民族綱領部分に掲げられた要求のうち, 「国際関係の分野で」第2項目については, 露語版・仏語版テキストでは「朝鮮, 中国, 台湾, サハリンからの軍隊の撤退」とあるが, 英語版では「朝鮮からの軍隊の撤退」とされている。

(3) *Le programme de l'internationale communiste: projets présentes à la discussion du 5<sup>e</sup> Congrès mondial (Paris, 1924), 131-135.*

れた「共産主義インタナショナル綱領草案」(全4章)と酷似していた。筆者がコミンテルン第四回大会関係文書より発見した「共産主義インタナショナル綱領草案」と、その『インプレコール』掲載テキスト<sup>(4)</sup>、および『綱領問題資料集』仏語版収録のテキスト<sup>(5)</sup>とを比較したところ、三者は同一のテキストであり、したがって「22年綱領草案」の一般綱領部分は、ブハーリン起草ながらも「共産主義インタナショナル綱領草案」とは別個に作成されたと結論づけられる。

ところで、コミンテルン第四回大会関係文書には、大会開催にむけて各国共産党より提出された報告書もまとめて収録されており、ここに「日本共産党報告書(1922年9月24日)」(РГАСПИ, 491/1/53/70-71)があった<sup>(6)</sup>。これは英文タイプ・テキストであり、末尾には“General Secretary [総務幹事]”である「アオキ・クメキチ」=荒畑寒村と、“Intern[ational]. Secretary [国際幹事]”である「サカタニ・ゴロウ」=堺利彦それぞれの直筆署名と、「日本共産党幹部之印」が押印されている。この報告書の下書きとなったと思われる日本語手書きテキストは、すでに「日本共産党中央執行委員会よりコミンテルン執行委員会幹部会宛報告書(東京, 1922年9月)」として露語史料集に収録されているが<sup>(7)</sup>、今回の発見により、本報告書が第四回大会開催にむけて執筆、モスクワへ送付されたものであったことが明らかとなった。

本報告書でとくに注目すべきは「我が党の綱領は、ご覧のとおりいまだ完成していない」という一文である。本報告書は綱領とともに送付されたと考えるのが自然であり、加藤哲郎が発見した「1922年9月の日本共産党綱領」<sup>(8)</sup>(以下「22年9月綱領」とする)にも、前述の署名と「日本共産党幹部之印」がそれぞれあることから、日本共産党がコミンテルン第四回大会に提出を企図した綱領が「22年9月綱領」であったと確定できる。筆者が閲覧した限りでは、「22年9月綱領」はコミンテルン第四回大会関係文書にはふくまれず、「日本共産党綱領草案」としては前述したように「22年綱領草案」が収録されるのみであり、前述の『綱領問題資料集』においても同様の扱いであったことから、日本共産党が起草した「22年9月綱領」の代案としてモスクワで「22年綱領草案」が起草され、コミンテルン第四回大会に提出されたことは、ほぼ確実とみてよいだろう。前稿で筆者は「22年綱領草案」の起草時期を「1922年12月以降, 1923年1月まで」としたが、「22年綱領草

---

(4) 独語版は、N. Bucharin: Programm der K.I. (Entwurf), *Internationale Presse-Korrespondenz*, 2. Jg. Nr.222 (21. Nov. 1922), S.1581-88. 英語版は、N. Bucharin: Program of the Communist International (Draft), *International Press Correspondence*, Vol.2, No.103 (28. Nov. 1922), 528-534.

(5) *Le programme de l'internationale communiste*, 33-55.

(6) 本報告書の末尾に記された日時は、当初「1922年9月7日」とされていたが、「7日」が抹消され、手書きで「24日」と上書きされている。

(7) РГАСПИ, 495/127/32/35-44; *ВКП(б), Коминтерн и Япония. 1917-1941 гг.* (Москва, 2001), 280-282. 筆者が発見したテキストと史料集収録のテキストには、いくつかの異同がある。とくに重要な異同として、筆者が発見したテキストには、第8番目の項目に「水平社は、日本における革命の中心となるだろう。これは、エタのみよりなる革命政党だが、ほとんど国家規模で組織されている。我々は水平社との緊密な接触を保っている」との部分があり、さらに補足説明として、欄外に手書きで「エタは日本人のうち特殊な人種であり、その数は約100万人にのぼる。彼らは一般の国民から憎まれ、軽蔑されている」と加筆されているが、これらの部分は史料集収録のテキストにはふくまれていないことを一例としてあげておく。

(8) 加藤哲郎「1922年9月の日本共産党綱領(上)(下)」『大原社会問題研究所雑誌』481-482号, 1998年11月-12月。

案」は1922年11月のコミンテルン第四回大会開催の時点ですでに起草されていたのである。

ところで、この場合問題となるのは、前稿でもふれたように、なぜ「22年綱領草案」の一般綱領部分がブハーリン起草の「共産主義インタナショナル綱領草案」と極めて酷似していたのかという点である。前述の各国共産党綱領草案にも一般綱領部分はふくまれるが、それらは「共産主義インタナショナル綱領草案」とは全く異なる構成、内容となっていた。この問題を解明することは、ブハーリン起草と現時点で筆者が推測する「22年綱領草案」の起草者を、あらためて確定するための重要な作業となろう。

## 2 本史料の概要

「24年2月綱領草案」起草に至る経緯と、その歴史的意義については前稿に記したとおりだが、以下にあらためてその要点をまとめておく。

1923年3月15日の日本共産党石神井臨時党大会は、モスクワより送付された「日本共産党綱領草案」＝「22年綱領草案」の審議を行うために開催された。しかし、来るべき日本革命の性格をめぐる議論が紛糾し、「22年綱領草案」は審議未了となり、日本共産党中央執行委員会は綱領委員会を設置して「22年綱領草案」にかわる新たな綱領草案の起草を行っていたが、6月の「第一次共産党事件」により活動は頓挫する。このとき検挙を逃れてロシア極東のウラジオストクに亡命した佐野学、近藤栄蔵、高津正道、辻井民之助らは、コミンテルン第三回拡大プレナム日本代表として入露していた荒畑寒村、コミンテルン執行委員会東方部在ウラジオストク代表・ファインベルクを加え、7月20日ウラジオストクで日本共産党在外ビューローを設立した<sup>(9)</sup>。在外ビューローは綱領委員会が行っていた綱領草案作成を継続し、その成果物としてこの「24年2月綱領草案」が起草されたのである。とりわけ、「24年2月綱領草案」で、日本独自の要求を記した民族綱領部分だけではなく、各国共産党に共通すべき一般綱領部分までも在外ビューローが独自に起草したことに注目し、「22年綱領草案」にかわるものとして「24年2月綱領草案」を新たに起草した事実こそ、コミンテルンに全面的に依拠せず自ら綱領を作成しようとした「第一次共産党」の意志の結実であったと筆者は評価した。

「24年2月綱領草案」の出典について示しておく、本史料には(1) 英語手書きテキスト(РГА СПИ, 495/127/92/1-33)、(2) 英語タイプ・テキスト(РГАСПИ, 495/127/92/34-56)、(3) 英語タイプ・テキストによる「第二版 [second project]」(РГАСПИ, 495/127/92/57-79)、(4) 英語タイプ・テキストによる「第二版」のコピー(РГАСПИ, 495/127/92/80-102)の四種がある。各テキストを比較したところ、(1)を清書したものが(2)のテキストであり、(2)・(3)・(4)は同一のテキストであった。なお、(1)と(2)には英語表現に若干の異同があるが、内容理解に影響を与えるものではない<sup>(10)</sup>。そのため、次章に示す日本語訳を作成するにあたっては(2)のテキストを底本とし

(9) 在外ビューローの設立と具体的活動については、拙稿「日本共産党ウラジオストク在外ビューローについての基礎的検討 ―第一次共産党事件以降の党活動の諸相―」(『キリスト教社会問題研究』56号, 2008年2月)を参照されたい。

た。その構成は、以下のとおりである<sup>(11)</sup>。

第1章	資本主義社会
第2章	資本主義社会の最近の発達
第3章	世界的な革命期の到来
第4章	共産主義社会
第5章	過渡期におけるプロレタリア国家
第6章	共産党の任務
第7章	日本社会の発達過程とその特質
第8章	日本共産党の戦術

このうち第1章から第6章までが、各国共産党に共通すべき一般綱領部分であり、第7章・第8章が民族綱領部分である。

前稿での指摘と重複するが、表1に示したように「22年綱領草案」の一般綱領部分は、プハーリン起草によりコミンテルン第四回大会（1922年11月）に提出された「共産主義インタナショナル綱領草案」<sup>(12)</sup>（全4章）をもとに改編した全6章によって構成されていた。このように構成は異なるものの、その具体的内容は「I. 資本主義的奴隷制」に加筆された一部を除き<sup>(13)</sup>、ほぼ同一である。

表1 「共産主義インタナショナル綱領草案」・「22年綱領草案」一般綱領部分内容対応表

「共産主義インタナショナル綱領草案」	「22年綱領草案」一般綱領部分
I. 資本主義的奴隷制	I. 資本主義的奴隷制
II. 労働者の解放と共産主義的社会制度	II. 労働者の解放と共産主義的社会制度
III. ブルジョアジーの没落と共産主義のための闘争	III. ブルジョアジーの打倒と共産主義のための闘争
D. プロレタリアート独裁と諸階級	IV. プロレタリアート独裁と諸階級
F. 帝国主義的圧迫の除去とプロレタリアートの自発的な国家的統合体の組織化	V. 帝国主義の圧力排除と自発的な国家連合の組織
IV. プロレタリアート独裁への道	VI. プロレタリアート独裁への道

(注) 「共産主義インタナショナル綱領草案」第Ⅲ章のA～C項は「22年綱領草案」の第Ⅲ章に、D～E項は第Ⅳ章に、F項は第Ⅴ章にそれぞれ対応している。

(10) 後述の注(16)・(17)で指摘する部分は重要な異同点であり、ここでは内容理解に影響を与えた可能性もあることを付記しておく。

(11) 本文中(2)のテキストの冒頭部分には目次が付されているが、目次に記された章タイトルと本文中にある章タイトルには若干の異同がある。ここでの訳出は後者によった。前者での記述については【資料】冒頭に記している。

(12) 独語版は、N. Bucharin: Programm der K.I. (Entwurf), *Internationale Presse-Korrespondenz*, 2. Jg. Nr.222 (21. Nov. 1922), S.1581-88. 英語版は、N. Bucharin: Program of the Communist International (Draft), *International Press Correspondence*, Vol.2, No.103 (28. Nov. 1922), 528-534.

(13) 「22年綱領草案」には、資本主義社会の前段階として位置づけられる地主・貴族による搾取の実態についての説明が加筆されている。

「24年2月綱領草案」の一般綱領部分も、「22年綱領草案」の一般綱領部分と同様に全6章で構成されるが、表1・2の比較から明らかのように、その各章のタイトルは完全に異なっている。その具体的内容は、表2に示したように「共産主義インタナショナル綱領草案」の論旨を大枠で継承しているが、「24年2月綱領草案」の一般綱領部分の分量を「共産主義インタナショナル綱領草案」と比較すると、総字数で約7割までに圧縮されており、「24年2月綱領草案」の一般綱領部分は、「共産主義インタナショナル綱領草案」で詳述された論旨の結論部分だけを引用した傾向が強いといえる。

また、細かい部分については英語表現をふくめて相当数の異同がみられる。本稿でこの異同について詳述する準備はないが、「24年2月綱領草案」にはコミンテルン第四回大会で設置された綱領問題委員会および、つづくコミンテルン第三回拡大プレナム（1923年6月）における綱領問題討議の内容が反映されているうえ<sup>(14)</sup>、第四回大会以降の世界情勢の変化、具体的にはドイツ革命の敗北を契機とした、コミンテルン内部における統一戦線戦術再検討の過程や、ファシズム批判がふまえられていることを指摘しておきたい。

表2 「共産主義インタナショナル綱領草案」・「24年2月綱領草案」一般綱領部分内容対応表

「共産主義インタナショナル綱領草案」	「24年2月綱領草案」一般綱領部分
I. 資本主義的奴隷制 ①搾取制度としての資本主義の一般的特徴付け ②労働力の販売と搾取の状態 ③資本主義制度の基本的諸矛盾の発展 ④資本主義の最後の段階 ⑤戦争の結果と資本主義の解体の開始 ⑥帝国主義戦線の突破と社会革命の時代	第1章. 資本主義社会  第2章. 資本主義社会の最近の発達 第3章. 世界的な革命期の到来
II. 労働者の解放と共産主義社会制度	第4章. 共産主義社会
III. ブルジョアジーの没落と共産主義のための闘争	第5章. 過渡期におけるプロレタリア国家
IV. プロレタリアート独裁への道	第6章. 共産党の任務

(注) 「共産主義インタナショナル綱領草案」第I章の①～③項は「24年2月綱領草案」の第1章に、④項は第2章に、⑤～⑥項は第3章にそれぞれ対応している。また、前者のII～IV章と後者の第4章～第6章は、タイトルは異なるものの、内容はほぼ重複している（ただし、第5章・第6章については、後者は前者に大幅な加筆を行ったものとなっている）。

第7章・第8章の民族綱領部分は、当時の「第一次共産党」の日本資本主義分析のあり方やその結果として導出されたその革命戦略を知りうる史料として、非常に有益なものである。起草にあたった在外ビューロー関係者は、1923年7月初めのウラジオストク到着以降、多くの日本語・英語による日本の情勢についての部門別報告書を執筆しており、そこでの把握や、関東大震災後に出され

(14) その経過と具体的内容については、加藤哲郎『コミンテルンの世界像 世界政党の政治学的研究』（青木書店、1991年）、80-95頁参照。とくに注目すべきは、「共産主義インタナショナル綱領草案」には、第四回大会でタールハイマー（ドイツ共産党）が批判したように統一戦線および労働者政府に代表される過渡的要求がふくまれていなかったのだが、「24年2月綱領草案」では「第5章 過渡期におけるプロレタリア国家」で、これら過渡的要求について言及されている。

た新テーゼが「24年2月綱領草案」には反映されている。そのため、民族綱領部分には、関連する報告書・テーゼの記述を注釈として付しており、日本語訳とあわせて参照されたい（なお注釈では引用文を現代かなづかいに改めた）。

次章では、筆者による「24年2月綱領草案」の現代日本語訳を紹介する。

### 3 「1924年2月の日本共産党綱領草案」日本語訳

#### 「日本共産党綱領 [草案]」<sup>(15)</sup>

##### 第1章 資本主義社会

共産主義は、資本主義社会を打倒し、それにかえて共産主義社会を樹立することを目的とする。共産主義社会の実現は、夢物語ではなく、人類社会の不可避的かつ最終的な発展である。しかしながら、共産主義は共産主義社会の到来を腕組みして待つだけの機械論にすぎないなどと捉えてはならない。その反対に、共産主義とは、この歴史過程を成し遂げるために奮闘する活発で活きた運動である。

封建社会の廃墟のうえに築かれた資本主義社会とは、結局のところ社会的生産の諸関係の進化に基づく歴史的発展の一形態である。資本主義社会は永続しうるものではないが、しかし、原始共産主義社会消滅以来人類社会の基本原則として存在し続けてきた搾取のシステムの、最も巧妙かつ残忍な最終的形態である。そして、資本主義社会が抱える多くの不調和や矛盾は内部から資本主義社会自体を崩壊させつつあり、一方、資本主義的発展の過程で生じつつあるさまざまな社会的諸条件は、来るべき栄光ある共産主義社会への必然的道筋を準備しつつあって、最終的には全人類が搾取のシステムから解放されることになる。資本主義社会においては、生産手段を所有し、生産と分配をコントロールする資本家という搾取階級が存在する一方、生産手段を有さず、自らの労働力を売ることによって生計を維持している労働者という被搾取階級が存在している。資本主義社会におけるこれら二種類の基本的階級は互いに隔てあい、敵対あるいは闘争関係にある。ブルジョアジーは生産手段を独占していることに加え、政府機関を掌握し、教育と宣伝の機構の手段をコントロールし、そのようにして社会全体へのブルジョアジー独裁を強化している。プロレタリアートは、ただ経済的方面のみならず、政治的方面かつイデオロギー的方面においても、ブルジョアジーによる支配に隷属することを強要されている。

資本主義のもとで社会の生産力は急速な発展をとげると同時に、その内部での不調和も拡大する。これらの不調和と矛盾は何であるか。第一に、生産手段の私有制度から生じる生産の無政府状態の出現と、結果的に加速する自由競争と周期的な経済恐慌の発生<sup>(16)</sup>。第二に、資本の集中と蓄積と

---

(15) 手書きテキストでは“Draft of the Program of the Communist Party of Japan”，その清書版であるタイプ・テキストでは“Program of the Communist Party of Japan”とされている。

(16) この一文は手書きテキストでは“Firstly, the appearance of anarchistic conditions of production resulting

同時に直面する自由競争の終局的頂点としての世界戦争<sup>(17)</sup>。第三に、資本主義的生産における利潤の段階的減少と、その生産手段の技術改良のあいだに不変資本が段階的に増加することによる絶対的不可能性。第四に、労働者階級の組織化された力の成長と、労働者階級のなかで階級意識をもつ部分によって指導される階級闘争の成長。

一方で、新社会建設のための基本的条件は着実に熟している。生産手段の集中、機械の高度な発展、労働の社会化、労働者階級の組織化、これらはまさしく来るべき新社会の萌芽である。

## 第2章 資本主義社会の最近の発達

19世紀の末期から、資本主義は新たな、しかし最後の発展段階にすすんだ。帝国主義の時代である。帝国主義のもとでは、資本主義は決定的に独占的になる。工業・銀行・商業・運輸などの分野における極端な資本の集中と蓄積の結果、競争にかわり独占システムが登場し、個別資本家にかわって巨大企業の資本家がトラスト、カルテル、シンジケートを組織するようになる。独占主義の登場は、競争を撤廃するものではなく、反対に競争をより激化させるだけであり、生産の無政府性や経済危機をただ強めるのみである。トラストと個別資本家のあいだの競争、トラスト間の競争、個別資本家間の競争、トラストと諸外国の国際的競争は、それ以前と比較して社会福祉に決定的な破壊をもたらす。資金への要求が高まるにつれ、トラストは金融資本への従属をより強化させられる一方、金融資本はこの状況によってより資本を集中する。金融資本とトラストが形成するグループにおいては、金融資本がより強力になる。しかしながら、今日の生産システム全体を支配するのは、ひとにぎりの巨大金融とトラストの王者たちである。

現段階における資本主義は世界資本主義に成長している。独占資本主義は、国内の自由競争市場で勝利をおさめたのち、すさまじい国際競争を開始する。自由貿易に保護関税がとってかわる。商品と資本の蓄積した輸出、安価な労働力の搾取、原料の獲得のために、植民地および半植民地諸国の存在は世界資本主義の競争の骨格を形成している。これら東洋の弱小国は、最も残忍かつ容赦ない搾取をうける対象とされている。

独占資本主義者は、自身の目的を達成するために国家の全機構を操縦するだけでなく、その目的遂行のため暴力に訴える。したがって軍国主義が前面にたち、軍備の増強は今日の趨勢である。この重荷は労働者、農民の肩に主にのしかかる。

しかし、同時に資本主義的システム崩壊の明確な徴候があらわれており、それは致命的となる。

見よ！ 帝国主義の時代における生産力のいちじるしい発達——電力、蒸気機関、飛行機、潜水艦、ラジオ、化学製品などの偉大な発明と改良——は、すでに資本主義的生産にたいする恐るべき

---

from the system of private ownerships of the means of production and the consequent acceleration of free competition and the periodic recurrence of economic crisis”となっていたが、タイプ・テキストでは下線部が”pre-competitive”とされた。タイプ・テキストの記述では意味が通じないためこれを誤記と判断し、ここでは手書きテキストでの”free competition”によって訳出した。

(17) ここでも手書きテキストでの”free competition”がタイプ・テキストでは”pre-competition”とされており、上と同様に”free competition”によって訳出した。



破壊の手段として存在している一方、来るべき共産主義社会のための基本的条件でもある。

見よ！ プロレタリアートのおかれた地位がますます惨めになるにつれ、工場や農場での彼らの搾取はより耐え難いものになる。さらに植民地の維持、軍備増強、工業保護のための重税という負担が、彼らの肩に重くのしかかる。これらの状況すべてが、労働者階級を急速に革命化している。中産階級を構成していた者は、急速にプロレタリアートの大衆へと零落しており、彼らにはプロレタリアートの革命軍の隊列に加わる以外の選択肢がない。

見よ！ 植民地の激動は、帝国主義の時代においてとくに激化する。ナショナリズム運動は、植民地における被搾取労働者大衆が担う革命的プロレタリア運動へと発展する。

また、ブルジョアジーは「母国」や「民主主義」という言葉で労働者階級を欺こうとしている。その一方で、資本家に与えられた植民地からの搾取という利権にほとんどあずからないだけ情け深い労働貴族は、「改良主義」によって労働者階級を酔わせ、支配階級に隷属させることを試みる。けれども、このようなすべての試みにもかかわらず、世界の被圧迫大衆の革命的意志は日ごとに高揚している。

### 第3章 世界的な革命期の到来

いくつかの国家における帝国主義的資本主義は、1914年から1918年にかけて最後の破壊に至った。世界戦争は生産からの収入の大部分および生産の基本的要素である労働力の大部分を破壊し、その結果世界の生産能力の弱体化を引き起こした。これまで存在していた世界的な交通・通信関係や、それにとまなう生産の国際分業体系は破壊された。戦後の経済危機は慢性化しており、長期化の傾向を指し示している。いくつかの国家の通貨価値が大きく変動したことは、世界経済に大混乱をもたらした。莫大な国債の発行は国民の重荷をふやした。工業と農業のあいだの無秩序はかつてなく著しいものとなっている。失業の暗雲が全世界の労働者に垂れこめている。中産階級の没落とその革命化は急速にすすんでいる。植民地とその「母国」の対立は激化している。階級闘争が至るところではじまっている。

戦争の勝敗に関係なく、すべての国家において、資本主義それ自体が戦後の社会的危機から脱することができないかわりに、資本主義それ自体が社会の再調整を妨害している。あらゆる国家における資本家はヴェルサイユ条約の仮面をぬぎすて、大胆にも世界戦争以前よりもさらに略奪的な帝国主義政策を実行している。あるいは労働者階級にたいして公然、非公然の暴力的攻撃を開始している。けれども、ブルジョアジーによるこれらすべての行為は、確実に資本主義社会崩壊の歴史的過程を急がせている。

世界大戦は、世界的なプロレタリア革命時代の到来を告げた。ロシアのプロレタリアートははじめてその鉄鎖を絶った。ロシアの労働者が示した例につづき、労働者が資本主義支配を転覆させようとした他の国々では、革命はそれぞれの国家でのより強力な反革命や社会民主主義の裏切りによって、大部分が失敗におわった。けれどもブルジョアジーとプロレタリアートの最後の決定的な闘いは少しも衰えていない。大規模なストライキの頻発、政治的かつ一般的性質をもつストライキ、至るところに存在する武装した革命的労働者、これらすべての事件は、いかに被圧迫大衆が直接的

にプロレタリア革命を求めているかを示している。一方、世界中の革命的プロレタリアートは彼らを導く星としてソヴィエト・ロシアを見上げている。すべての資本主義国家における生産力と生産条件の矛盾がますます増加する一方で、ソヴィエト・ロシアの経済的・社会的生活は日に日に安定する。世界大戦ののちに残った5つの資本主義国家——イギリス・アメリカ・フランス・日本・イタリア——は、他のすべての弱小国を植民地化することを企図しているだけではなく、無益にもソヴィエト・ロシアを破壊しようと目論んでいる。ソヴィエト・ロシアの支援は、われわれの最も重要な任務である。けれども、われわれの前にはファシズム、社会民主主義などの反動的勢力が立ちはだかる。闘争のみが、われわれが進軍するための唯一の可能な道である。

#### 第4章 共産主義社会

共産主義インテリゲンチヤの終局目標は、資本主義社会にかわる共産主義社会を建設することにある。共産主義社会の出現は歴史的発展段階によって必然とされており、共産主義社会のみが資本主義社会のすべての基本的諸矛盾を一掃することを可能とするとともに、共産主義社会のみが人類の前途にある唯一の進路となる。

共産主義社会では生産手段の私的所有は終わり、生産手段の社会的所有が行われる。したがって、合理的システムと生産計画が無秩序な競争や生産の無政府性にとってかわる。生産の無政府性と競争の消滅は、戦争の消滅をもたらす。生産力の莫大な濫費や闘争をつうじた社会進化にかわり、社会の調和した進化の過程が出現する。

共産主義社会では、社会の階級への分割は終わる。生産の無政府性の消滅にともない、社会的無政府性も消滅する。階級闘争にかわってあらわれるのは、労働者が組織する強力なコミューンである。

私有財産と階級の消滅は、人間による人間の支配や、搾取にもとづく労働者の支配を廃止する。富める者と貧しき者も同様に消滅する。階級支配の機構、とくにその巨大機構である国家は消滅する。国家の消滅はすべての強制的機構の消滅をともなう。

階級の消滅とともに、教育機関の独占も終わる。すべての教育機関は真にひらかれたものとなり、すべての人々がその能力を最大限にのばすことが許される。

共産主義社会では私有財産、特許、私利の追求など、生産能力の発達をさまたげる障害は存在しない。共産主義社会における技術と科学の融合、科学的な生産組織、統計学的社会調査、自然力の完全な利用などは、人類の労働にその最大限の生産能力の達成を可能とさせる。このように、共産主義社会においては巨大な生産力の一步が踏み出される。

生産力の発達、新社会における人類全体の福祉を向上する。文化は歴史上かつてないほどの発展段階へと到達する。

国境が存在しない共産主義社会では、全人類はなんらの障壁もなく直接協力する。このように、人間の直接的・相互的な関係にもとづく来るべき新文明では神秘話、迷信、偏見は消滅し、人類の知識が完成されることになる。

## 第5章 過渡期におけるプロレタリア国家

資本主義社会と共産主義社会のあいだには、時間的なインターバルが存在する。ブルジョア国家を打倒し、自らの手に政治的権力を握ったプロレタリアートは、プロレタリア独裁の実現のためにその権力を行使する。それぞれの国家での革命の進展は資本主義の発展段階、歴史的特性、地理的位置などの状況によって異なるだろう。しかし、それぞれの国家はこの中間期を経過することのみによって、共産主義者の規律にもとづく社会へと到達するだろう。中間期におけるプロレタリア国家は、内部的には国家の内部からブルジョアジーを打倒する必要がある、他の社会をプロレタリア化して共産主義社会の経済組織の建設を開始しなければならない。そして外部的には残るブルジョア国家によるすべての攻撃と闘争する。

### 1 政治的分野で

プロレタリア独裁は、過渡期における労働者階級にとって最も高度なスローガンである。プロレタリアートは第一にプロレタリアート自身による独裁を樹立しなければならない。その政治体制は議会にかわりソヴィエトが中心とされる。議会はブルジョアジー独裁の政治的道具であり、真の民主主義を体現するものではまったくない。真のプロレタリア民主主義を完成させるためには、プロレタリア独裁の樹立がまず第一に実現されねばならず、その政治形態は労働者・農民・兵士その他“働く人”の代表によってのみ構成されるソヴィエトによる。このようなソヴィエトはプロレタリアートの階級的権力の象徴であるだけでなく、プロレタリアートの活動がなす最高の組織である。

プロレタリアートは、ブルジョアジーがもつすべての権利と特権——言論、出版、集会、結社、教育の自由——を剥奪する。

プロレタリアートは武装すべきであり、赤軍を形成しなければならないと同時に、ブルジョアジーの武装を解除する。このことは外国のブルジョアジーによる攻撃のみならず、反革命を粉砕するために不可欠である。

### 2 経済的分野で

経済的分野での建設の方法は、労働者階級の勝利以前に存在するそれぞれのプロレタリア国家における資本主義的発展の度合い——生産手段の私有関係、生産能力の状態、金融その他——によって異なるだろうが、その建設についての原則は以下のとおりである。

- a) すべての基礎的産業 [all basic industries] を国有とすること
- b) すべての資本主義的企業を国家統制のもとでトラストへと統合すること
- c) 大土地所有の没収。社会主義的に管理された農場の創設、中農・小農の財産の不可侵
- d) 銀行の国有化、銀行がもつすべての通貨の没収、銀行の集中、銀行業務をプロレタリア国家の中央銀行の手に委ねること
- e) 国家による食料資源の独占
- f) 国家による外国貿易の独占

- g) 国家による大規模な国内商取引 [large home trades] の独占
- h) 国債の無効
- i) 国家による住宅の管理
- j) 鉱山および天然資源の国家所有
- k) 小規模工業の協同組合への統一
- l) 義務的労働システムの創設
- m) 新聞その他重要な広報手段の国家による独占

資本主義から共産主義へと移行するために、労働者階級は強いモラルと鉄の規律によって武装しなければならない。資本主義的レジームのもとで労働者の戦闘的組織として存在する労働組合は、新社会建設のための有機体の主要部分となる。協同組合もその有機体の一端を担う。ストライキのような階級闘争の方法は、存在意義を失う。たとえば労働者のストライキは、プロレタリア国家においては国家への反逆を意味している。

### 3 社会的分野で

プロレタリア国家は、社会を清める任務を精力的に担わねばならない。資本家、地主、貴族と彼らにへつらう者、官僚および軍国主義者は無慈悲に一掃されねばならない。プロレタリア革命と重要な関係を有する知識労働者、とくに技術者は、その反動的傾向から嚴重に保護すべきであり、彼らを革命の陣営へと引き入れねばならない。中農および小農については、中農は中立的立場に、小農はプロレタリアートの支持者となるように彼ら自身に判断を委ねるべきである。都市のプチ・ブルジョアジーについては、彼らを高利貸付による支配から自由にするとともに、彼らがつ中小規模の所有財産への不可侵によって、彼らを中立化しなければならない。これらの階級の政策の達成は、すべてのプロレタリア組織（労働組合、協同組合、党）の活動にかかっている。

プロレタリア国家は、教育手段の資本主義的独占を破壊すべきであり、高等教育をふくむすべての教育手段はプロレタリア国家の手に握られねばならない。科学的、技術的、軍事的教育は実用的にされねばならない。プロレタリアートの文化的レベルはより高められねばならない。プロレタリアートを政治的・社会的に啓蒙することは、彼らをブルジョアジーおよびプチ・ブルジョアジーのイデオロギーから自由にする。また、労働者と科学の結合は、プロレタリア国家の重要な義務のひとつである。

大衆への有毒なアヘンである宗教の廃止は、プロレタリア国家におけるもうひとつの重要な社会的事業である。

### 4 民族問題の分野で

植民地、半植民地、民族国家、帝国主義的宗主国は、資本主義と密接に結びついている。プロレタリア国家は植民地の解放、すべての民族の自決、ソヴィエト共和国連邦という観点から、これに根本的に反対する。プロレタリア国家は、たんなる平和主義に立脚するものではなく、プロレタリアートの利益を保護する必要に応じて干渉を行う。赤色帝国主義 [Red imperialism] は不可能ではない。

## 第6章 共産党の任務

資本主義がかかえる自己矛盾は、現在その頂点に達している。資本主義は、それ自身から生じる多くの社会的危機に直面したとき無力となる。一方で、将来における共産主義社会にむけての基本的条件はじょじょに実現されつつあり、その新社会の計画者かつ建設者は労働者階級である。プロレタリアートは共産主義社会の建設をつうじた自己の解放によって全人類を解放する。

共産党は最も勇気をもち、最も階級意識に富み、最も進歩した、完全に自身の歴史的使命を理解した労働者階級の分子による組織である。共産党は少数者による独裁を要求するものではなく、すべての労働者階級の利益のために行動する組織である。共産党はプロレタリアートの道徳的かつ本質的な階級的団結を最も高度に表現しており、階級闘争のためのもっともすぐれた組織である。

共産党は国際的な中央集権を受け入れる。世界プロレタリアートの団結と運動は、ひとつの中央集権的な国際的指導力を必要とする。その結果、各国共産党は共産主義インタナショナルの支部として活動を行う。

共産党は厳格な革命の規律を受け入れる。鉄の規律は、共産主義運動の団結の源泉であるとともに、新たなプロレタリア道徳の直接的な表現である。

共産党はすべてのプロレタリア運動の指導的立場にたつ。共産党は大衆の日常的闘争を、その広い展望、鋭い分析と勇気ある行動によって革命化する。ブルジョアジーにたいするすべての革命的組織を統一するために、共産党は統一戦線 [united front] というスローガンのもとでプロレタリアートの戦線を強化する。農民大衆、知識人その他社会における労働者分子をひきよせ、彼らを革命的運動へと結合することは党の重要な任務である。

共産党の目的はプロレタリア独裁とソヴィエト体制を樹立することであり、プロレタリア独裁の予備的政治形態である労働者農民政府 [workers' and peasants' government] の樹立に努力する。労働者農民政府はプロレタリアートによる政治権力の完全な奪取を、都市のプロレタリア大衆の動員と、農村地域からの支持をつうじて準備する。

共産党は植民地あるいは半植民地における革命的運動に特別な注意をはらう。これらの諸国での反乱は、今日の独占資本主義をずたずたに破壊する強力な方法である。同時に、より小さな諸国での革命的運動を支援することは、人種差別的感情から解放された真に国際主義的な感情である。

共産党は労働組合、工場委員会、協同組合その他同様の労働者組織をつうじた大衆への接触によって、大衆を革命へと引き寄せる。労働者組織への依存、あるいは日常的な労働者の闘争に参加することなしには、大衆を革命へと引き寄せることはより実現不可能となる。共産党は青年労働者および女性労働者に特別な注意をはらう。

共産党は細胞をその組織の基本的形態とする。細胞は党の活動と成長の単位である。細胞は地域別ではなく職業別に構成されるべきである。

共産党は帝国主義、軍国主義、そして新たな資本主義的戦争の危機とたたかう。反軍国主義運動は、党の最も重要な活動のひとつである。

共産党はブルジョア革命がまだ十分に発展していない国家では、ブルジョア革命のために闘争

する。ブルジョア民主主義のための共産党の闘争の目的は、資本主義のもとに残存する独裁政治および封建制度をぬぐい去ることにあり、同時にブルジョア民主主義の組織である議会、地方議会などを利用して大衆を革命へと引き寄せることにある。共産党は、ブルジョア民主主義の力で政治的権力を獲得することを目的とはしていない。いうまでもなく、今日の議会、出版および言論の自由などは、ただブルジョアジーのみが享受する権利と自由である。

共産党は軍事力により政治権力を奪取することを目的とする。けれども、それは大衆の組織的暴力によるものであり、個々のテロリズムを意味するものではない。暴力的存在であるとして共産党を恐れ、共産党の存立に反対するブルジョアジーは、純粹に暴力によってその支配階級としての地位を得て、そして保持している。ブルジョアジーの暴力は、それが公然であるか否かを問わず、資本主義没落の時代においてはとくに恥知らずなものとなる。ブルジョアジーの暴力が反動的かつ絶望的になると、プロレタリアートの組織的暴力は革命的かつ道徳的になる。

共産党は改良主義的な労働組合および党に反対する。労働貴族によって指導されるこれらの組織は、プロレタリアートの側に立たず、資本主義体制の支持者となる。

共産党はソヴィエト・ロシアとともに確固として立つ。ソヴィエト・ロシアはすべての反資本主義運動の基礎であり、それゆえに、ソヴィエト・ロシアの発展はプロレタリアートの国際的運動と最も密接な関係を有している。

## 第7章 日本社会の発達とその特質<sup>(18)</sup>

日本における社会革命は、世界プロレタリア革命に対してふたつの重要な関係を有している。日本資本主義が世界資本主義の重要な一要素であること、および日本が地理的に東洋のより弱小な国家の中心に位置していることがその理由である。日本共産党は他国の共産党と同様に、共産主義インタナショナルの規律のもとに存在し、共産主義インタナショナルの綱領に基づいて行動する。しかし、同時にその戦術は日本社会、とくにその資本主義的発達とその発展の特質にみあった性格をもつべきである。

日本資本主義は1868年革命<sup>(19)</sup>以降、西洋資本主義の刺激のもとで急速な発達を遂げてきた。比

---

(18) 「22年綱領草案」英語版（PTACПИ, 495/127/50/124-164）の民族綱領部分で“capital”は、生産様式・生産関係をさす術語として使用され、階級関係をさす場合には“bourgeois”あるいは“bourgeoisie”を術語として使用していたのに対し、「24年2月綱領草案」の民族綱領部分（第7章・第8章）では、この区別がふまえられないままに“capital”が多用されている。「24年2月綱領草案」で“bourgeois”あるいは“bourgeoisie”が使用されているのは、ブルジョア革命 [bourgeois revolution] ・ブルジョア民主主義 [bourgeois democracy] ・ブルジョア自由主義者 [bourgeois liberalists] ・日本ブルジョアジー [Japanese bourgeoisies] の四例にすぎない。なお、加藤哲郎が発見した「22年9月綱領」（PTACПИ, 495/127/9/104-107；*БКП(б), Коминтерн и Япония*, 282-285；日本語訳は加藤「1922年9月の日本共産党綱領（上）」、44-48頁参照）でも同様に“capital”が多用されており、「22年9月綱領」での“bourgeois”の用例はブルジョア民主主義 [bourgeois democracy] ・ブルジョア機構 [bourgeois institution] ・ブルジョア・イデオロギー [bourgeois ideology] ・ブルジョア資本家 [bourgeois capitalist] の四例である。

較的遅く世界市場に参入した日本資本主義が現在の高度な発達段階へと到達するには、労働者を容赦なく搾取し、極端な保護主義政策およびあからさまな軍国主義を採用することが必要不可欠だった。日本資本主義は戦争とともに発展してきた<sup>(19)</sup>。とくに近年の世界大戦は、日本を主要な資本主義国家のひとつへと押し上げた。だが、資本主義への弔鐘は、すでに日本でも鳴り響いている。日本の慢性的な経済危機、失業の氾濫、労働者の反乱、物価の高騰、海外市場の縮小など、さらには人口の過剰、原材料の不足、重工業の未発達その他の重要な欠陥は、日本資本主義を直接的かつ根本的に脅かしている。とくに1923年9月の大地震は、日本資本主義への深刻な打撃であった。英米資本家は、すでに日本を彼らの植民地にしようとしはじめており、現在日本を資本の輸出先として好ましい市場とみなしている<sup>(21)</sup>。その一方で、日本ブルジョアジー [Japanese bourgeoisies] は資本を集中し、国家資本主義を採用し、あるいは労働者をより苛烈に搾取することによって、以前の地位を回復することを目論んでいる<sup>(22)</sup>。だが、日本国内の資本主義的生産の条件は、日本ブルジョ

(19) 「1868年革命」とは明治維新をさすが、佐野学執筆と推測される日本語報告書「日本の労働者の経済闘争」(PTACPII, 495/127/60/71-74; 加藤哲郎「第一次共産党のモスクワ報告書(上)」『大原社会問題研究所雑誌』489号, 1999年8月, 55頁)には、以下の記述がある。

「1867年に日本に行はれた革命はブルジョア革命であった。これより日本は古き封建的形態を脱して、欧羅巴風の資本主義的階段に入った」

明治維新は、「24年2月綱領草案」起草の時点ではブルジョア革命として認識されていたということになる。ところで「24年2月綱領草案」起草の時点まで、上述の報告書に明らかなように、日本側が明治維新をさす場合には「1867年革命」と表記するのが通例であった(たとえば、「日本共産党宣言(1921年4月)」(村田陽一編訳「資料集 コミンテルンと日本」第1巻, 大月書店, 1986年, 484-485頁; *ВКП(б), Коминтерн и Япония*, 261-262)には、「1867年の革命は、商業資本が封建制に勝利したものだ」とある)。だが、コミンテルン側では極東諸民族大会(1921年1月)における片山「日本の政治・経済問題についての報告」(村田前掲書, 42-54頁)で「1868年革命」という呼称が使用されて以来、コストランスキー「日本における選挙権運動(1922年6月)」(同前, 370-374頁)、ヴォイチンスキー「日本における諸階級の闘争(1922年9月)」(同前, 374-387頁)でも、「1868年革命」という呼称が踏襲されていた。つまり、「24年2月綱領草案」では、コミンテルンによる呼称が採用されたということになるが、この「1867年」と「1868年」という認識のちがいは、なにをもって明治維新の「実現」とみなすのかという当時の見解のちがいが反映されていると思われる。

(20) 注(19)前掲「日本の労働者の経済闘争」には、以下の記述がある。

「しかし経済的発達に於て立ちおくれた日本が、東洋に於ける唯一の大泥棒として立つに至るには、三つの条件が必要であった。第一は極端なる保護政策であり、第二は戦争による植民地及び市場の掠奪であり、第三は鉄の規律の下に労働者階級を圧迫することであった。…日清戦争、日露戦争、世界戦争は日本今日の資本主義を生育した母である」

また、佐野学執筆の日本語報告書「日本に於けるプロレタリア青年の状態に関する報告」(PTACPII, 495/127/60/46-59, これを圧縮した英語報告書 "The condition of the proletarian youth in Japan" がPTACPII, 495/127/67/75-78)に、およびその日本語下書きがPTACPII, 495/127/60/24-42にある。このうち英語報告書には露語手書きで「1923年7月17日」との書き込みがされている)には、以下の記述がある。

「日本の資本主義は欧羅巴の資本主義史に於けるが如き自由貿易の時代を経過したものでない。明治維新後の新政府は欧羅巴の資本主義に対抗する為に極度の保護政策をとった。海外に対しては常に侵略的態度を持して来た。此の故に日本の資本主義は最初より帝国主義的、軍国主義的であった」

アジアの欲求に沿うものではなく、日本資本主義は一步一步最後の没落へと歩を早めている<sup>(23)</sup>。

日本の政治制度は、議会と責任内閣制 [responsible cabinet] をともなう立憲君主制 [constitutional monarchy] によりなる。しかし、ブルジョア民主主義 [bourgeois democracy] は、いまだ日本では高度に発達していない。元老、官僚、そして軍国主義者は、日本資本主義の産婆役を実際にはたしてはいるが、同時に彼らは特殊な封建的社会グループを形成して、彼ら自身の特殊な意図をも持っている。そして、彼らは古い封建的勢力の残存物である貴族・地主とともに、日本におけるブルジョア民主主義の発展を遅らせている。しかし、この半専制的 [semi-autocratic] 政府の背後にはひとにぎりの巨大資本家があり、彼らが前述の封建的社会グループと政治家とを容易に操縦している。ブルジョア自由主義者 [bourgeois liberalists]、中産階級 [the middle class]、プロレタリアは、いまだ政党によって代表されていない。議会では、制限選挙によって選出された資本家と地主の代表のみがのさばっている。したがって、日本政府は半専制的かつ半封建的である<sup>(24)</sup>。

(21) 「震災後における日本共産党の戦術についてのテーゼ（1923年11月5日、コミンテルン執行委員会）」（РГАСПИ, 495/127/41/1-6；*ВКП(б), Коминтерн и Япония*, 311-314；村田陽一編訳『資料集 初期日本共産党とコミンテルン』大月書店, 1993年, 3-6頁）には、以下の記述がある。

「英米資本にたいしては、日本政府は譲歩をかさね、最小抵抗線をすすんでいる。日本政府は、イギリスとアメリカで復興のための借款をうける準備をしている。今日の条件のもとでは、世界帝国主義者は、真に隷属的な条件でなければ、日本に資本を供与しないであろうことは、いうまでもない。日本政府がアングロサクソン資本に支払わざるをえないであろう莫大な利子は、日本の勤労人民に重い負担となつてのしかかることだろう」（引用の訳文は村田による）

(22) 「ヴォイチンスキーより日本共産党への露語電報（1923年9月14日、モスクワ）」（РГАСПИ, 495/127/44/5；*ВКП(б), Коминтерн и Япония*, 302）には、以下の記述がある。

「労働者・農民からの搾取の強化により国富を回復しようとする国家ブルジョアジーの企ては、必然的に日本の英米資本への従属を強化させ、日本を帝国主義の餌食とするだろう」

(23) 佐野学、高津正道、近藤栄蔵は第一次共産党事件検挙直前に日本を脱出、上海を経由して7月上旬までにウラジオストクに到着した。彼らは上海からウラジオストクへの船中で執筆した日本語報告書（РГАСПИ И, 495/127/61/81-98；加藤「第一次共産党のモスクワ報告書（下）」, 38-44頁）、およびこれをもとにしてウラジオストク到着直後に執筆した英語報告書（РГАСПИ, 495/127/58/44-55）の二つの報告書を、三者の連名でコミンテルン執行委員会宛に残している。両者の内容は基本的にはほぼ同一であり、本稿では日本語報告書を引用することにするが、ここには以下のような記述がある。

「日本の資本主義は他国の資本主義と同じく漸次に崩壊の過程を露骨にしつつある」

(24) 日本語報告書「現今日本に於ける政治状態」（РГАСПИ, 495/127/72/49-54；加藤哲郎「第一次共産党のモスクワ報告書（上）」『大原社会問題研究所雑誌』489号, 1999年8月, 51-55頁）には、以下の記述がある。

「現在の日本に於ては、政治的権力を直接に積極的に動かしている者は、支配階級である。枢密院（天皇の政治諮問機関にして所謂元老の住家なり）、貴族院、衆議院。無産階級は未だその代表者の一人をもこれ等の機関に有せず、単に間接的に極めて少しばかり彼等の政権の運用を牽制しているに過ぎない。この支配階級は次の如き三要素から成り立っている。(a) 貴族・官僚, (b) 地主, (c) 資本家。

日本に於ては、この中で貴族院が勢力を有する (a) が長く政治的中心勢力を把握して専制を行っていたが、近年に至つてこの封建的要素は漸次に勢力を失ひ、衆議院が漸次に勢力を得来る傾向と、(b) 漸次に勢力を失ひ、(c) が漸次に勢力を得来る傾向とは、他の資本主義国の歴史の如くであるが、日本の貴族官僚（その



日本の社会諸階級は明らかに敵対しあっている。ここにも一定の封建的特徴はみられるが、資本主義の社会的プロセスはほぼ完全である。搾取階級としては資本家・地主がおり、さらに彼らの周囲には官僚・軍国主義者・貴族・政治家がいる。中産階級の発達は、比較的広範囲にわたる。知識人 [intellectuals], サラリーマン [salaried men], 技術者 [technical specialists], 中級官吏 [middle class officers] は、量的に無視できない比重を占めるグループである。被搾取階級として賃金労働者 [wage workers], 農民大衆 [agrarian masses], 被差別部落民 [“Eta”] の三グループがあり<sup>(25)</sup>、彼らの階級意識は非常に明確である。日本の賃金労働者は、その組織面では強力とはいえないが、彼らは革命的であり、闘争の準備ができています。日本の賃金労働者のおかれた経済的条件が極めて苛酷であるにもかかわらず、彼らが西洋の労働組合の伝統に拘束されておらず、彼らのほとんどが読み書き可能であるために、日本の労働者は資本家と協調しようという願望をほとんど抱いておらず、それゆえに改良主義が日本に根付く機会はほとんどない<sup>(26)</sup>。

階級は、日本の将来における社会革命にとって、とくに重要な位置にある。日本の総人口の60%は農民 [farmers] であり、農業が国民経済に重要な関係を有しているがゆえに、とくに農民人口 [agrarian population] の動向は注視されねばならない。農民が組織的に闘争する力量は非常に高い。被差別部落民については、その絶望的な社会的地位ゆえに、その闘争へのエネルギーもまた非常に強く、革命を待ち望んでいる<sup>(27)</sup>。

---

主魁は所謂元老)と、多くの場合彼等を支持する地主との勢力は、まだ甚だ強いものがある。

(c)が最近に至って(b)の勢力を包含する既成政党に依っては、完全に自階級の利害を代表し得ざることを自覚し、新たに純粹なる資本家党『商工党』[実業同志会をさす 一引用者]を組織し初めたことは、支配階級中に利害関係の相違の存在することを示すものであるが、彼等苟も無産階級に対する時は常に完全なる共同戦線に立つことを忘れない]

(25) 注(23)前掲日本語報告書には、以下の記述がある。

「日本におけるプロレタリア運動は、以下の三つのグループに分類できる。(1)労働運動、(2)農民運動、(3)水平運動」

(26) 注(19)前掲「日本の労働者の経済闘争」には、以下の記述がある。

「日本の労働組合は欧羅巴の労働組合の如き歴史と伝統とを有しないから、その形態及び活動は極めて新しく、自由である」

(27) 注(23)前掲日本語報告書には、以下の記述がある。

「水平運動は極めて猛烈なるプロレタリア運動である。それは古代日本の賤民の子孫にして今日猶ほ伝統的に社会的賤視を蒙っていた特殊部落民と呼ばれる社会的集団の反逆運動である。彼らの数は約300万人あり、全国に散在している。団結心、復讐心、等の心理的条件が完全である」

注(23)前掲英語報告書では、「水平運動は、日本の歴史上抑圧されてきた人びとによる、最も断固とした爆発的変動である」とされており、日本語版での「古代日本の賤民の子孫」という視点がほやけた記述となっている。この異同は、日本語版を執筆したと推測される佐野(加藤「第一次共産党のモスクワ報告書(下)」, 38頁)の水平運動への認識を知るうえでの興味深い検討材料となろう。

なお、佐野はウラジオストク到着直後の1923年7月付で日本語報告書「水平運動」(PГA C ПИ, 495/127/60/7-19; 関口寛「初期水平運動と佐野学 一史料紹介「水平運動」(佐野学)一」『部落解放研究』183号, 2008年10月, 31-48頁)を執筆しているが、そこには以下の記述がある。

「然して彼等[被差別部落民 一引用者]は長い圧迫の結果として其心理状態が甚だ反逆運動に適するよう

日本の軍国主義は、資本主義に奉仕して暴力と抑圧を行ってきた。軍事費は常に国家予算の大きな部分を占めてきた。日本の軍隊を構成する主要要素は、プロレタリアートとりわけ農民青年 [agrarian youth] だが、軍隊における鉄の規律は、兵士から反抗的精神を奪うとともに、彼らを容易に搾取している<sup>(28)</sup>。対外的には軍隊は帝国主義の代理人だが、対内的には軍隊は革命運動を抑圧する道具と化している。日本における革命運動の発達とともに、軍国主義の中心的要素である軍高官のみならず、中級士官 [the middle class officers] までもが革命運動の抑圧に乗り出してきた。軍国主義者のスローガンとして「国家主義」、「汎アジア主義」などがあるが、それらはただ日本資本主義を擁護するこじつけにすぎない<sup>(29)</sup>。日本に伝統的にある反動的国家主義イデオロギーは、軍国主義と結びつくことで特別な反動的力を得ており、今では革命に対する白色テロと化しつつある<sup>(30)</sup>。

朝鮮、台湾では情け容赦ない搾取が進行しているが、その一方でこれらの地域における革命運動は日々発達している。これら植民地における革命的分子の役割は、日本における社会革命と結びついて大きな重要性を有している。

にしている。団結心、復讐心、相互扶助心の強烈な事は何物にも比較することが出来ない程である」

(28) 注(20)前掲「日本に於けるプロレタリア青年の状態に関する報告」には、以下の記述がある。

「日本には極めて厳格な徴兵制度が行われている。その大部分を形成するのはプロレタリア階級の子弟である。…軍隊に於て彼等は鉄の如き規律の下に奴隸的生活をする。兵卒は集会、結社、言論等の政治的権利を毫も有しない。上官の命令は天皇の命令と同視せられる。陸海軍刑法は古代専制国の法律の如く厳格であつて、例えば兵卒四人以上が団結して上官の命令に反抗した時はこれを徒党と見做し、これを無期徒刑若しくは死刑に処することが出来る。陸海軍の監獄は非常に惨酷なるものである」

「軍隊が其の兵卒の淵源として最も重視するものは農村青年である」

(29) Aoki [荒畑寒村], Matsumoto [山崎一雄], "Fascism in Japan" (ПГАСИИ, 495/127/37/66-70; 本テキストは、プロフィンテルン機関誌『赤色労働組合インタナショナル』1923年7月号に掲載された「前進するファシズム」(日本語訳は『運動史研究9』三一書房, 1982年, 96-98頁)のオリジナル原稿とされる(加藤「第一次共産党のモスクワ報告書(下)」, 44頁)には、以下の記述がある(引用は『運動史研究9』の日本語訳によった)。

「日本のファシストが官憲や資本家と密接に結ばれており、みごとに組織されていることがわかる。彼らの目的は、無防備の日本プロレタリアートをすっかり抑えつけ、資本にたいして奴隸的屈従を強いることである…

さらに日本には有力な国家主義グループがあり、ブルジョア進歩分子もその仲間になっている。この団体は、アジア諸民族を結集し、ヨーロッパ人種の桎梏から「解放」することを自己の任務としている。この運動には、各種の国家主義的・軍国主義的分子が参加している」

(30) 注(29)前掲 "Fascism in Japan" には、以下の記述がある。

「最近、これらすべての分子 [ファシスト、国家主義グループ —引用者] のあいだに、ファシスト団体の国粋会に合同しようとする傾向が目につきだした。イタリアにおけるファシスト反革命とクーデターのあとをうけて、この志向がとくにはっきりしてきた…

万一日本のブルジョアジーが強力なファシスト組織の創設に成功しようものなら、日本の労働者は、イタリアの兄弟たちよりもっと重い苦悩に当面することになる。日本の労働者はすべての勤労者の前衛として、強い労働組合団体と政治団体の助力によってのみ、ファシズムを殲滅することができるであろう」

また、注(23)前掲日本語報告書には、以下の記述がある。

「日本に於ては伊太利F [ファシズム —引用者] に類似する反動団体の発生の可能性がある。即ち国家主義を掲げ暴力を行使する団体である。…JCPは将来これらのものとも争闘する場面を有するであろう」

## 第8章 日本共産党の戦術

日本共産党の目的は、プロレタリアート独裁を基盤としたソヴィエトを日本で樹立することにある。この目的を達成するために、日本共産党は共産主義インタナショナルの一般綱領〔common program〕に服するだけでなく、日本特有の諸条件に適合した戦術に従うことを必要とする。

そのために、日本共産党は以下の戦術に従って行動する。

(1) 日本共産党は日本国内のすべての革命運動において、常に指導的役割をはたさなければならない。日本共産党はすべての革命的勢力を結集した統一戦線〔united front〕のオルガナイザーとなるべきであり、統一戦線を支え、指導しなければならない。

(2) 日本共産党の目的は、現存の政治体制を打倒し、それにかわる労働者農民政府〔a workers' and peasants' government〕を樹立することにある。

(3) 日本共産党は、国内におけるブルジョア革命〔bourgeois revolution〕の完成を支援しなければならない。そのために、日本共産党は完全な普通選挙権の獲得に努力しなければならないとともに、プロレタリアートの合法政党〔a legal political party of proletariats〕を組織しなければならない。

(4) 日本共産党は労働組合へと徹底的に浸透しなければならない。日本共産党は労働組合が自らを数的に強化することを支援しなければならない。日本共産党は革命におけるサンジカリズム的傾向を一掃するべきであり、日本共産党は共産主義的な政治意識をより明確にしなければならない。日本共産党は労働組合が改良主義〔reformism〕にむかう傾向を阻止して、労働組合を赤色労働組合インタナショナルへと加盟させねばならない。

(5) 日本共産党は農民階級〔the peasant class〕にとくに注意をはらわねばならない。農民〔the peasants〕の日常的闘争に加わることで、農民組合へと浸透すること、農民の階級意識・政治意識を発達させること、そして農民を都市労働者〔city workers〕と結合させることは、日本共産党の主要な任務である<sup>(31)</sup>。

---

(31) 日本語報告書「現在に於ける日本の共産主義運動の状況」(PTACPIII, 495/127/67/179-212)には、以下の記述がある。

「日本の人口の六割は農民であって、農民の多数は急速に無産階級化しつつある。最近二カ年に農村に於ける階級的意識は著しく進歩し、今や至る所に小作人の組合を組織して地主に対抗しつつある。日本の共産主義者は小作人組合を以て農村に於ける階級闘争を促進せしめる最良の方法と認め、小作人組合の組織を援助し、組合の内部に共産主義者のニュークレアを作ることに努めて居る。

都会の労働者と農民運動の間には、今までの所では何等の連絡がない。日本の共産主義者は階級的に自覚した都会の労働者をして先づ農民運動に対する感情的の援助を与えしめ、両者の運動の連絡を造ることに充分の力を用いて居る」

注(24)前掲「現今日本に於ける政治状態」には、以下の記述がある。

「無産階級運動に於いて小作人と都市労働者との団結を計ることは極めて大切である。然るに両者の利害関係は必ずしも一致しない点がある。そして地主は努めてこの点を高調して自分等に向う反感を都会(その中には労働者もいる)に向けようとする。この両者を緊密に団結せしめる為には、両者の連合会の組織を企つべしとの説があるが、別個に政党を組織して両者を是に加盟せしめる方がより有効である」

(6) 日本共産党は水平社と完全に協力しなければならない。日本共産党は水平社を社会革命へと導かねばならず、水平社を将来建設される新社会における最も強力なユニットのひとつとしなければならない<sup>(32)</sup>。

(7) 日本共産党は、党を支援させるために中産階級を中立化させるよう努力しなければならない。日本共産党は中産階級が反動的陣営に走ることを阻止しなければならない。

(8) 日本共産党は軍国主義と勇敢に闘わねばならない。日本の軍隊が内部から崩壊して、その後に革命運動が自発的に起きるだろうということは、少なくとも当面の間は期待できない。日本においてプロレタリアートが完全に武装解除されているという事実は、革命の途上にある重大な障害物のひとつである。日本共産党は兵士、水兵およびプロレタリア青年の間で、反軍国主義運動を精力的に行わねばならない。

(9) 日本共産党は植民地（朝鮮、台湾）における革命的分子と緊密に協力しなければならない。日本共産党はナショナリスティックな植民地独立運動 [nationalistic independent movements] において彼らを支援すると同時に、これらの運動をプロレタリア革命運動 [proletarian revolutionary movement] へと導かねばならない。

(10) 日本共産党は忠君愛国 [loyalty to King<sup>(33)</sup> and patriotism] に代表されるような、日本に浸透している伝統的で反動的なイデオロギーと闘争しなければならない。これらのイデオロギーは、純粹かつ単純に資本を擁護するものでしかないという事実を知らしめねばならないと同時に、これらイデオロギーの反動的提携は粉碎されねばならない。

(11) 日本共産党は青年運動および女性運動の発展のために尽力しなければならない。

(12) 日本共産党は中国、インド、朝鮮およびすべての東方諸国の革命的分子との緊密な関係を保持しなければならない。

以上の一般的戦術 [general tactics] を基礎として、日本共産党は当面の要求 [immediate demands] を掲げるとともに、その実現のために闘争する。当面の要求は以下のとおりである。

#### 政治的・社会的分野

- 1 君主制 [monarchy] の廃止
- 2 貴族院 [House of Lords] の廃止
- 3 18歳以上への無制限の普通選挙権
- 4 労働者・農民の完全な団結権

<sup>(32)</sup> 注<sup>(23)</sup>前掲英語報告書には、注<sup>(23)</sup>前掲日本語報告書にはない以下の記述がある。

「日本共産党は水平社の指導的分子を教育して、水平運動全体をプロレタリア運動の路線に服させねばならない」

<sup>(33)</sup> 1923年4月末、コミンテルン第三回拡大ブレナム参加のため入露した荒畑は、1923年5月付で「日本共産党臨時党大会における意見相違点」と題する英語報告書を執筆しているが（РГАСПИ, 495/127/62/1-7）、ここでは天皇の呼称として「22年綱領草案」と同様に「Mikado」を使用している。「24年2月綱領草案」で天皇の呼称として「King」が使用されたことを、その立憲君主制という把握をふまえて検討すると、「24年2月綱領草案」の起草者は、立憲君主制国家モデルとしてイギリスを想定したとも考えられる。

- 5 言論・出版・集会の自由
- 6 デモの自由
- 7 ストライキの自由
- 8 軍隊・警察・憲兵隊およびスパイ制度 [spy system] の廃止
- 9 労働者・農民の武装
- 10 被差別部落民に対する差別の完全な撤廃
- 11 死刑制度の廃止
- 12 華族制度の廃止
- 13 土地・奢侈品への高率課税制度および高率の累進課税制度の創設
- 14 間接税の廃止
- 15 教育の機会均等
- 16 生活必需品価格の公的統制
- 17 家父長制の廃止

#### 経済的分野

- 1 8時間労働
- 2 労働者保険
- 3 最低賃金
- 4 工場委員会による工場管理
- 5 労働組合・農民組合の資本家・地主・政府との団体交渉権の承認
- 6 女性労働者および若年労働者の保護
- 7 報道機関および公共交通機関の公有

#### 農業分野

- 1 大土地所有の無償での没収
- 2 土地の国有
- 3 小作制度の改善
- 4 農民金融制度の公的経営

#### 国際関係の分野

- 1 帝国主義的干渉の廃止
- 2 朝鮮からの軍隊の撤退
- 3 植民地の放棄と植民地民族の自決
- 4 ソヴィエト・ロシアの承認

この綱領草案は、1924年2月にウラジオストクの日本ビューローで作成した。同時に、日本ビューローと日本共産党中央執行委員会とが、日本とウラジオストクでそれぞれ独自に綱領草案を作成

し、日本で作成された綱領草案をコミンテルン第五回大会の代表者がウラジオストク、あるいはモスクワに携行することが同意されていた。その後、ふたつの草案を比較研究して、第五回大会に提出する最終的な綱領草案を作成する予定であった。しかし、日本共産党中央執行委員会作成の綱領草案は、いまだ当地に到着せず、到着するとしても非常に遅れるだろうとの見込みから、われわれはウラジオストクで作成した綱領草案を参考資料として提出するものである。

（くろかわ・いおり） 神戸大学大学院総合人間科学研究科博士後期課程）

〔付記〕 本研究は、第八回原田彦彦・部落史研究奨励金による研究成果の一部である。

●各研究分野におけるオーラルヒストリーの歴史と現状  
法政大学大原社会問題研究所編—A5判二七六頁三五七〇円(税込)

## 人文・社会科学研究所とオーラルヒストリー

まえがき

- I 歴史研究とオーラルヒストリー
- II オーラルヒストリーの実践と同時代史研究の挑戦—吉原陽子著
- III 女性史研究とオーラルヒストリー—倉敷伸子
- IV 社会学とオーラルヒストリー—江頭詠子
- V 私の社会調査実践と生活小史法—辻勝次
- VI 労働調査(聴取り調査)とライフヒストリー—山本潔
- VII 労働研究とオーラルヒストリー—梅田健二
- VIII 大原社会問題研究所のオーラルヒストリー—吉田健二
- IX 韓国の労働史研究とオーラルヒストリー—李鍾久

●日中相互の留学生派遣の実態を通して近代の日中関係史を再検討  
大里浩秋・孫安石編著—A5判五〇四頁九六六〇円(税込)

## 留学生派遣から見た近代日中関係史

- ・近代の日本人中国留学生—桑兵
- ・戦前の外務省の中国への留学生派遣について—明治大正期を中心に—川崎真史
- ・駐清公使矢野文雄の提案とそのゆえ—清末における留日学生派遣の契機—孫安石
- ・戦前中国人留學生の「実習」と「見学」—大里浩秋
- ・在華本邦補給生、第一種から第二種まで—劉振生
- ・「満州国」日本留學生の派遣—祁建民
- ・善隣協会と近代内モンゴル留學生教育—川島真
- ・日本占領期華北における留日學生をめぐる動向—三好章
- ・維新政府と江兆銘政権の留學生政策—制度面を中心に

●当時の銀行関係者へのインタビュー調査など貴重な資料を元に分析  
林幸司著—A5判二六〇頁五四六〇円(税込)

## 近代中国と銀行の誕生

- 金融恐慌・日中戦争—
- そして社会主義へ—
- 三年—から近現代中国の政治・社会・経済的変動過程を具体的に説明する。

●(地域の自律性)を基本視座に組合製糸の経営と農村構造を分析  
田中雅孝著—A5判四二六頁七三三〇円(税込)

## 両大戦間期の組合製糸

- 長野県下伊那地方の事例—
- 組合製糸地帯として主研究対象となる長野県の飯田・伊那地方の蚕糸業の地域特性について両大戦間期を中心に美証的に説明する。

御茶の水書房

〒113-0033 東京都文京区本郷5-30-20 電話03(5684)0751  
ホームページ <http://www.ochanomizushobo.co.jp/>

## 【資料】 “Program of the Communist Party of Japan”

(本資料の翻刻は英語タイプ・テキスト (PGACIII, 495/127/92/34-56) により, 明らかなスペルの間違いについては筆者が訂正を行った)

- Chapter I. Capitalist Society.
- Chapter II. The Latest Development of Capitalism.
- Chapter III. Arrival of the World-wide Revolutionary Age.
- Chapter IV. Communist Society.
- Chapter V. The Proletarian State.
- Chapter VI. Tasks of the Communist Party.
- Chapter VII. The Development of Japanese Society and Their Characteristics.
- Chapter VIII. The Tactics of the Communist Party of Japan.

### Chapter I. Capitalist Society.

Communism aims at the abolishing of Capitalist Society and in the establishing of a Communist Society in its place. The realization of communist society is not an Utopia, but it is an inevitable and eventual development of human society. From that, however, it must not be taken for granted that Communism is a mere mechanical theory awaiting the coming of a communist society with folded hands. On the contrary, it is a living as well as an active movement which strives to accomplish this historic process.

Capitalist society, which has built itself upon the ruins of the feudal society, is after all, a form of historic development based upon the evolution in the relations of social production. It is not an everlasting reality, but is the most subtle, the most brutal, and the final form of the system of exploitation, which has long been a basic principle of human society since the disappearance of the primitive communistic society. And many inconsistencies and contradictions in the capitalist society are disrupting itself from within, while various social conditions arising in the process of capitalistic development are preparing the way inevitable for the glorious Communist Society to come, and will in the end liberate the whole human race from the system of exploitation. In a capitalist society there is the exploiting capitalist class, on one side, which holds the means of production in its hands and which controls the production and the distribution of products, while on the other side there is the exploited working class, which possesses no means of production, but which sells its labour power to sustain its life. These two fundamental classes of capitalist society separate themselves from each other, antagonise and fight. Besides monopolizing the means of production, the bourgeoisie grasp the organs of the state in their hands, control the systems and means of education

and propaganda, and thus strengthen their dictatorship over society. The proletariat are compelled to subjugate themselves to the rule of the bourgeoisie, not only economically but also politically and ideologically.

Under capitalism the productive power of society develops tremendously, but at the same time, inconsistencies within also increase. What are those inconsistencies and contradictions? Firstly, the appearance of anarchistic conditions of production resulting from the system of private ownership of the means of production and the consequent acceleration of pre-competitive and the periodic recurrence of economic crisis; secondly, the looming up of the world war as the ultimate climax of the pre-competition coincident with the concentration and accumulation of capital; thirdly, the gradual decreases of profit in capitalistic production and its ultimate impossibility owing to the gradual increase of invariable capital in the course of technical improvements of the means of production; and fourthly, the growth of the organised power of the working class and of the class struggle led by the class-conscious section of this class.

In the meantime, the basic conditions for the construction of a new society ripens steadily. The concentration of the means of production, the high development of machinery, the socialising of labour, the organisation of the working class –these are the very embryos of the new society to come.

## Chapter II . The Latest development of Capitalism.

Since the last days of the nineteenth century, capitalism has entered into a new but the last stage of its development –the period of imperialism.

Under imperialism, capitalism becomes decidedly monopolistic. As the result of the extreme concentration and accumulation of capital in the fields of industry, banking, commerce, transportation, etc., the monopoly system takes the place of competition, and instead of individual capitalists, gigantic corporations of capitalists come forward in the forms of trusts, cartels, and syndicates. This appearance of monopolism does not abolish competition, but, on the contrary it simply makes it greater. It only produces still greater anarchistic conditions of production and still greater economic crises. The competition between trusts and individual capitalists, the competition between trusts themselves, and the international competition between the trusts in different countries result in far more fearful destruction of social welfare than before. Trusts being compelled, by increasing necessity for funds, depend more and more upon financial capital, while financial capital concentrates itself more and more by force of circumstances. In the grouping of financial capital and trusts, the former becomes more powerful. However, those who rule the whole system of production of the present day are the handful of gigantic financial and trust kings.

At this period of capitalism, it becomes the world capitalism. The monopolistic capitalism, after its victory over the free competition within the country, starts the fierce international competition. In



place of free trade there comes the protective tariff. For export of accumulated merchandise and capital, for the exploitation of cheap labour, and for the acquisition of raw materials, the colonial and semi-colonial countries become the bone of contention of the world capitalism. This weak nations of the East are thus made the objects of the most brutal and relentless exploitation.

The monopolistic capitalists not only manoeuvre the entire machinery of the state for the achievement of its own object, but also it resorts to the use of brute force for the end. Thus, militarism comes to the foreground, and the increase of armaments becomes the order of the day. The burden of this mainly falls upon the shoulders of the workers and of the peasants.

But, at the same time, the breaking down of the capitalistic system becomes marked and accentuated. It becomes fatal.

Lo! the phenomenal development of productive forces in this period –the great inventions and improvements in electricity, steampower, aeroplanes, submarines, radios, chemical applications, etc., has already become the terrible means of destruction against the capitalistic productions, while it is the basic condition for the coming communist society.

Lo! while the position of the proletariat has become more and more miserable, their exploitation in factories and on farms has become still more unbearable, and the burden of heavy taxes for the maintenance of colonies, for the increase of armaments and for the protection of industries falls upon their shoulders crushingly. All these conditions are rapidly making the working class revolutionary. The members of the middle class are rapidly falling into the ranks of the proletariat and they have no choice but to come to the camps of revolutionary army of proletariat.

Lo! the upheavals in the colonies become particularly intense at this period. More nationalistic movements develop into proletarian revolutionary movements of the exploited working mass of colonies.

Meanwhile, the Bourgeoisie endeavour to cheat the working class in the names of “Mother land” and “democracy”, while the labour aristocrats, gracious for the meagre shares of spoils of colonial exploitation which capitalists grant to them, attempt to intoxicate the working class with “reformism” in service of the master class. But, in spite of all that, the revolutionary will of the toiling masses of the world grows day by day.

### Chapter III. Arrival of the World Wide Revolutionary Age.

The imperialistic capitalism of several countries came to a final crush in 1914-18. the world war destroyed much of the income from productions, and of the labour power, which is the basic element of production, and caused the weakening down of the productive capacity of the world. The hitherto existing international communicational relations and together with them the international division of production have been destroyed. The economic crisis after the war has become chronic and is indicating itself as a lasting one. The great fluctuation in the values of currencies of several

countries have brought correspondingly great confusion in the world economy. The enormous issues of state loans have increased the burdens of the people of the countries concerned. Disorders between industries and agriculture have become more than ever marked. The dark cloud of unemployment is hanging over the working class of all the world. The break-down of the middle class and its revolutionisation are going on rapidly. The antagonisms between the colonies and their “Mother countries” are increasing. The class struggle has started everywhere.

In all countries, regardless of whether victorious or defeated, capitalism is unable to extricate itself from the social crises after the world war, but instead is hindering itself the social readjustment. The capitalists in every country have cast aside the masks of the Versailles Treaty and boldly have come out with the imperialistic policies far worse predatory than before the war, or have started offensive moves with brute force, openly or secretly, against the working class. But all these acts of the bourgeoisie are surely hastening the historic processes of disintegration of the capitalistic society.

The world war has ushered in the epoch of the world-wide proletarian revolution. The proletariats of Russia have first broken their chains. In other countries where the workers have attempted to overthrow the rule of capitalism, following the example shown by the Russian workers, revolutions have failed chiefly because of stronger counter revolutions in respective countries or through betrayals of social democracy. But the final and decisive battle between the bourgeoisie and the proletariat has not abated in the least. The frequent occurrences of gigantic strikes, the political and mass character of these strikes, the armed revolts of workers everywhere –all these events indicate how straightly the toiling masses are heading toward the proletarian revolution. Meanwhile the revolutionary proletariat the world over are looking up toward Soviet Russia as their guiding star, while the contradictions between productive forces and conditions of production in all capitalistic states are more and more increasing, the economic and political life of Soviet Russia becomes daily more steady. Five remaining capitalistic powers after the world war –England, the United States, France, Japan and Italy, are not only endeavouring to subject into colonies all other weaker nations, but also are vainly attempting to crush Soviet Russia. To support Soviet Russia is our most important task. Against us, however, all the reactionary forces of Fascism, social democracy, etc., are arrayed. Fighting is the only possible way for our forward march.

#### Chapter IV. The Communist Society.

The final aim of the Communist International is the establishment of a communist society in place of the capitalist society. The appearance of communist society is made inevitable by the processes of historic development, and such only is capable of removing all the fundamental defects of capitalist society, and such only is the only path ahead of the human race.

In a communist society, the private ownership of the means of production ceases, and instead the

public ownership of such means takes place. Consequently, a rational system and plan of productions supplants the disorderly competitions and anarchistic conditions of production. The disappearance of anarchistic production and competition brings the disappearance of wars. In place of enormous waste of productive power and in place of social evolution through struggle, there appears a harmonious evolutionary process of society.

In a communistic society, division of society into classes ceases. Together with the disappearance of anarchistic conditions of production, the anarchistic conditions of society also disappear. What appears in place of struggling classes is a mighty commune of workers.

The disappearance of private properties and classes abolishes the rule of men by men, and the labour based on exploitation. The rich and the poor alike disappear. The organs of class rule, particularly the gigantic class organ, the state, disappear. The disappearance of state is accompanied by the disappearance of all organs of coerciveness.

Together with the disappearance of classes, the monopoly of the organs of education also ceases. All the organs of education become really public and every person is permitted to develop her or his talent and ability to her or his fullest extent.

In a communistic society there is no barrier which hinders the development of productive capacity, such as private property, monopoly license, profit making, etc., Combination of technics and sciences, scientific organisation of production, statistical social investigation, full utilisation of economic as well as natural forces, enable human labour to attain its greatest productive capacity in a communistic society. Thus, in the communistic society, a gigantic forward stride of productive power takes place.

The development of productive power increases the welfare of the whole human race in the new society. Culture attains a height never reached in the past history.

In communist society, where there is no barrier of the state, the whole human race directly cooperates without hindrances. Thus the new civilisation, based upon the direct, mutual relation of men, abolishes all the mysteries, superstitions, prejudices, and bring the consummation of the knowledge of man.

## Chapter V. The Proletarian State in Transitional Period.

Between the capitalist society and the communist society, there is an interval of time. The proletariat who has destroyed a bourgeois state and has taken political power into his own hands, wields that power in order to execute the dictatorship of the proletariat. The course of revolution in different countries will differ according to the degree of the development of capitalism in those particular countries, their historic peculiarities, their geographical positions, and other conditions; but they may come to a communist order of society only by passing through this intermediate period. The proletarian state at this period has, internally, to crush the bourgeoisie within the

country, to proletarianise the rest of society and to begin the construction of the economic organisation of communist society, and, externally, to fight against all attacks of remaining bourgeois states.

### **1. In the Political Sphere.**

The Dictatorship of the Proletariat is the highest slogan for the working class at this transitional period. The proletariat must establish the dictatorship of their own class first of all. Its political system is based upon the Soviet instead of the parliament. The parliament is a political organ for the dictatorship of the bourgeoisies and not the expression of true democracy by any means. In order to consummate the true proletarian democracy, the Dictatorship of the Proletariat must, in the first place, be brought forward, whose political form is the Soviet composed only of the representatives of workers, peasants, soldiers and other “man who work”. Such Soviets are the expression of the class force of the proletariat as well as the high organ of their activities.

The proletariat wrest from the bourgeoisie all their rights –rights and privileges of free speech, press, meetings, association, education.

The proletariat must arm themselves and organise a red army, at the same time disarming the bourgeoisie. This course is absolutely necessary in order to crush counter-revolutions as well as the attacks of the foreign bourgeoisie.

### **2. In the Economic Field.**

The manner of constructive work in the economic field will differ according to the degree of the capitalistic development of any particular proletarian state –the relations of private ownership of the means production, the conditions of productive capacity, finance, etc., of that country prior to the victory of the working class, but the fundamentals of the constructive works are as follows:

a/ The state ownership of all basic industries.

b/ The consolidation of all capitalistic enterprises into trusts under state control.

c/ The confiscation of large land properties; the establishment of socialistically managed farms; the non-interfering with middle and small farmers’ properties.

d/ The nationalisation of banks; the confiscation of all currencies in banks; the concentration of banks; and their management into the hands of the central bank of the proletarian state.

e/ The state monopoly of food stuffs.

f/ The state monopoly of foreign trade.

g/ The state monopoly of large home trades.

h/ The abrogation of state loans.

i/ The state management of housing.

j/ The state ownership of mines and other natural resources.

k/ The unification of small industries into cooperatives.

l/ The establishment of the system of obligatory labour.

m/ The state monopoly of newspapers and other important press organs.

In order to pass from capitalism to communism, the working class must be armed with strong moral power and iron discipline. The labour unions which are a fighting organ of workers under the capitalistic regime, become a main part of the organic units in the building up of the new society. The cooperative societies also serve in this organic function. Such methods of class struggle as strikes lose causes for their existence, for a strike of workers, for instance, in a proletarian state means a revolt against their own state.

### **3. In the Social Sphere.**

The proletarian state must set itself vigorously to the task of clearing society. Capitalist, landlords, nobles, and their lackeys, bureaucrats and militarists, must be swept away without mercy. Intellectual workers and particularly technical workers, who have an important relation with the proletarian revolutions, must be closely guarded against their reactionary tendencies and must be brought into the camps of revolution. The lands of middle and small farmers must be left to them, so that to make the middle farmers neutral and the small farmers the supporters of the proletariat. The petty bourgeoisie of cities must be neutralised by making them free from the control of usurious capital and at the same time not interfering with their middle sized or small holdings. The accomplishment of these class policies depends upon the activities of all proletarian organisations (labour unions, cooperatives, parties).

The proletarian state must destroy the capitalist monopoly of the means of education and must secure in its hands all the means of education, including the higher institutions. The scientific, technical and military education must be made practical. The cultural level of the proletariat must be made higher and higher. To enlighten them politically and socially, to free them from bourgeois and petty bourgeois ideologies, and to unite labour and science are some of the important duties of the proletarian state.

The abolishment of religion, which is the opium poisonous to the masses, is another important social undertaking of the proletarian state.

### **4. On the National Questions.**

Colonies, semi-colonies, national states, imperialistic mother countries are intimately connected with capitalism. The proletarian state opposes them fundamentally with the liberation of colonies, the self-determination of every nationality and the federation of Soviet republics. The proletarian state does not stand on simple pacifism, and if necessary for the protection of the interests of the proletariat, it may intervene. Red imperialism is not impossible.

## Chapter VI. The Tasks of the Communist Party.

The self-contradictions within capitalism have now reached to their climax. Capitalism is powerless in the face of numerous social crises resulting from them. Meanwhile, the basic conditions for the future communist society are gradually materialised, and the projector as well as the actual builder of the new society is the working class. The proletariat liberates the whole human race by the very act of self-liberation through establishment of communist society.

The communist party is the organisation of the most daring, the most class-conscious and the most progressive elements in the working class, who fully understand this historic mission. The communist party does not seek after the dictatorship of minority, but acts for the interest of the whole working class. The communist party is the highest expression of the moral and material class solidarity of the proletariat, and is the best organ of the class struggle.

The communist party submits to an international centralisation. The solidarity and movements of the world proletariats need one centralised international leadership. Thereupon, the communist parties in various countries act as sections of the Communist International.

The communist party submits to a rigorous revolutionary discipline. This iron discipline is the source of the solidarity of communist movements and is the direct expression of the new proletarian morality.

The communist party sets itself to lead all proletarian movements. It revolutionises the daily struggle of the masses with its broad vision and sharp analysis and daring acts. In order to unite all the revolutionary forms against the bourgeoisie, the communist party solidifies the proletarian battle fronts by the slogan of United Front. Inducing the peasant masses, the intellectuals and other working elements of society to join in the revolutionary movement is an important task of the party.

The communist party purposes to establish the Dictatorship of the Proletariat and the Soviet, and endeavours to set up the workers' and peasants' government as a preliminary political form of the Dictatorship of the Proletariat. The workers' and peasants' government prepares for the complete seizure of power by the proletariat, through mobilisation of the city proletarian masses as well as by creating forces for support in rural districts.

The communist party lays a particular importance upon the revolutionary movements in colonial or semi-colonial countries. Revolts in these countries are powerful means tending to the destruction of monopolistic capitalism of today. At the same time, leading assistance to the revolutionary movements of smaller nations is an expression of the genuine internationalism totally free of racial discrimination.

The communist party leads the masses toward revolutions by coming in touch with them through labour unions, factory committees, cooperatives, and similar organisations of workers. Attempting to lead the masses to revolution without depending upon the workers' organisations and without

taking part in the daily struggles of workers is mere impossibility. The communist party pays particular attention to the working youths and the working women.

The communist party adopts the nuclei as the basic forms of its organisation. The nuclei are the units of activity and growth of the party as well as of its organisation. They should be formed on the basis of occupation rather than local basis.

The communist party fights against imperialism, militarism, and the danger of new capitalistic wars. The Antimilitarism movement is one of the most important actions of the party.

The communist party fights for the bourgeois revolution in countries where it has not yet fully developed. The purpose of the struggle of the communist party for bourgeois democracy is to wipe away autocracy, and feudalism still remaining under capitalism, and at the same time to lead the masses nearer toward revolution by taking advantage of the machinery of bourgeois democracy –parliaments, municipal councils, etc, etc., The party does not intend to acquire political power by dint of bourgeois democracy. It is needless to say that the present day parliament, the freedom of association, press and speech, etc. etc., are nothing but the right and freedoms for bourgeoisie alone.

The communist party purposes to gain political power by force of arms. It is, however, by the organised violence of the masses, and not by individual terrorism. The bourgeoisie, who fear and object the communist party because of violence, have gained and are holding their position as the ruling class purely through the force of violence. The bourgeois violence, open or otherwise, has become particularly bold in these hours of the fall of capitalism, and while it is reactionary and desperate, the organised violence of the proletariat is revolutionary and moral.

The communist party opposes reformistic labour unions and parties. These organisations led by labour aristocrats are the supporters of the capitalist system instead of being on the side of the proletariat.

The communist party stands firmly with Soviet Russia. The Soviet Russia is the base of all anti-capitalist movements and, therefore, the development of Russia has the most intimate relation with the international movement of the proletariat.

## Chapter VII. The Processes of the Development of Japanese Society and Their Peculiarities.

The social revolution in Japan has two important bearings upon the world proletarian revolution. That Japanese capitalism is an important element in the world capitalism and that the country is situated geographically amidst the weaker nations of the East are the reasons. The Communist Party of Japan exists under the rule of the Communist International and acts according to the program of the International like other communist parties in different countries, but at the same time its tactics should retain a specified character conforming with the Japanese society, particularly her capitalistic development and its peculiarities.

The Japanese capitalism has developed with a great rapidity since the revolution of 1868 under the stimulation of the western capitalism. In order to attain the present highly developed state for the Japanese capitalism, which has entered in the world arena at comparatively late hours, it has been necessary for her to exploit workers relentlessly, and to adopt an extreme protective policy and almost glaring militarism. The Japanese capitalism has grown with wars. Particularly the recent world war has made Japan one of the foremost capitalist countries. But the death bell of capitalism is already ringing in Japan. The chronic state of economic crisis, the flood of unemployment, the revolts of workers, the high prices of goods, the shrinking away of her markets abroad, etc., together with her overpopulation, scarcity of raw materials, low development of heavy industries, and other main defects, are threatening the Japanese capitalism directly and fundamentally. Particularly the great earthquake of September 1923 was a severe blow to Japanese capitalism. The English and American capitalists have already started to bring Japan into the category of their colonies, and are now considering her as their favourable market for their export of capital. On the other hand, the Japanese bourgeoisies are attempting to recover their former position by means of concentration of capital, by adoption of state capitalism or by greater exploitation of their workers, but the conditions of capitalistic production in the country are not in conformity with their desire and are, step by step hastening toward the final fall.

The Japanese system of governments consists of the constitutional monarchy with a parliament and a responsible cabinet, but bourgeois democracy is not yet highly developed in this country. The Genro, the bureaucrats and the militarists are in reality so many midwives of capitalism in Japan, but at the same time they form a special feudalistic social group and set with a special intension of their own. And, side by side, with the remnants of old feudalistic power, nobles and landlords, they are retarding the development of bourgeois democracy in the country. However, there are a handful of gigantic capitalists behind this semi-autocratic government who are easily controlling all the aforementioned feudalistic social groups and politicians. The bourgeois liberalists, the middle class and the proletariats are not represented yet in forms of political parties. In the parliament, only the representative of capitalists and landlords, elected by a system of limited franchise, are strutting about. Then the Japanese government is semi-autocratic and semi-feudalistic.

The Japanese social classes are clearly antagonistic. Although certain feudalistic traits are visible here too, the social process of capitalism are well neigh complete. As the exploiting class there are capitalists and landlords and around them bureaucrats, militarists, nobles and politicians. The development of the middle class has comparatively been extensive. Intellectuals, salaried men, technical specialists, and middle class officers are groups quantitatively not to be trifled with. As the exploited class there are three groups of wage workers, agrarian masses and the "Eta". Their class-consciousness is very clear. The Japanese wage workers are not strong in the scope of their organisation, but they are revolutionary and are ready to struggle. Being free of traditions of the Western labour unions and a great majority of them being able to read and write, while their



economic conditions are extremely oppressive, the Japanese workers have little desire to reconcile with capitalists and, therefore, reformism has scarcely opportunity to root itself in Japan.

The class stands in a particular importance in the future social revolution of Japan. That farmers occupy sixty percent of the total population of the country and that agriculture has an important bearing upon the national economy are the reasons why the tendency of the agrarian population must be keenly watched. Their organisational and fighting capacities are very high. As to the “Eta”, because of their desperate social position, their fighting energy is also very strong, and they straight way look forward to revolution.

The Japanese militarism has come perpetrating violence and oppression in service of capitalism. The military expenditures have always occupied a large percentage of the national budget. The main elements of the Japanese army are the proletariats particularly the agrarian youth, but the iron discipline in the army has deprived the revolting spirit of soldiers and is exploiting them with ease. Outwardly the army is the implement of imperialism, but inwardly it is a tool to put down revolutionary movements. Along with the development of the revolutionary movement in Japan, not only the higher officials of the army, the central element of militarism, but also the middle class officers are beginning to exert themselves in the task of crushing revolutionary movements. As slogans of militarists there are such as “Nationalism”, “pan-Asiamism”, etc., which are nothing but quibbles in the defence of Japanese capitalism. The traditional reactionary nationalistic ideology of Japan has a special reactionary force by uniting with militarism, and is now ripening into a white terrorism against revolution.

Relentless exploitations are going on in Korea and Formosa, while the revolutionary movements in these territories are daily developing. The functions of the revolutionary elements in these colonies in connection with the social revolution in Japan are of great importance.

### Chapter VIII. The Tactics of the Communist Party of Japan.

The aim of the Communist Party of Japan is the establishment of a Soviet Japan based upon the Dictatorship of the Proletariat. For the accomplishment of this object, the Communist Party of Japan not only submits to the common program of the Communist International, but also deems it necessary to follow certain specific tactics conformable to specific conditions.

Thus the Communist Party of Japan acts on the following tactics:

1/ The Communist Party of Japan must always be the leading power in all the revolutionary movements in the country. It must be the organiser of the united front which unites all the revolutionary forces, and must sustain it and lead it.

2/ The Communist Party of Japan purposes to overturn the present political system and in its place to establish a workers' and peasants' government.

3/ The Communist Party of Japan must assist the consummation of bourgeois revolution in the

country. For their purpose it must endeavour to bring forth a full universal franchise and must organise a legal political party of proletariats.

4/ The Communist Party of Japan must thoroughly permeate into Labour unions. It must assist them to strengthen themselves numerically: it must dispel the syndicalistic tendencies of revolution and make the communistic political consciousness more definite: it must prevent the tendency toward reformism and bring Labour unions to the Red International of Labour Unions.

5/ The Communist Party of Japan must pay special attention to the peasant class. To join in the daily struggle of the peasants, to permeate into the peasant unions, to develop their class and political consciousness, and to make them unite with city workers are some of the main tasks of the party.

6/ The Communist Party of Japan must fully cooperate with the Suihei Sha. The former must lead the latter toward social revolution and make it one of the most powerful units in the future construction of the New Society.

7/ The Communist Party of Japan must endeavour to neutralise the middle class so as to make it support us. It must prevent the middle class running into reactionary camps.

8/ The Communist Party of Japan must daringly fight against militarism. That the Japanese army will crumble down from within and that thereafter a revolutionary movement will spontaneously spring up, can not be expected for a time to come at least. The fact that the proletarians are completely disarmed in Japan is one of the grave obstacles on the way to revolution. The Communist Party of Japan must energetically conduct anti-militarism movements amidst the soldiers and sailors and among the proletarian youths.

9/ The Communist Party of Japan must intimately cooperate with revolutionary elements in colonial territories (Korea and Formosa). It must help them in their nationalistic independent movements and, at the same time, lead these movements toward the proletarian revolutionary movement.

10/ The Communist Party of Japan must fight against the traditional reactionary ideologies prevalent in Japan -loyalty to King and patriotism. The fact that these ideologies are far nothing but pure and simple defence of capital must be made known, and at the same time their power for reactionary combination must be crushed to pieces.

11/ The Communist Party of Japan must exert itself to develop both youths' and women's movements.

12/ The Communist Party of Japan must keep intimate connection with the revolutionary elements in China, India, Korea and all other Eastern nations.

Upon the foundation of the general tactics as above mentioned The Communist Party of Japan sets up the immediate demands and fights for them. These demands are as follows:

### **Political and Social**

- 1, Abolishment of monarchy
- 2, Abolishment of the House of Lords
- 3, The universal suffrage with no limitation above eighteen years
- 4, Full right for workers and peasants to unite
- 5, Freedom of speech, press and meetings
- 6, Freedom of demonstration
- 7, Freedom of strike
- 8, Abolishment of army, police, gendarmerie and spy system
- 9, Arming of workers and peasants
- 10, Complete non-discrimination for the “Eta” people
- 11, Abolishment of capital punishment
- 12, Abolishment of aristocracy
- 13, Establishment of high taxes on properties, and luxuries and high progressive taxes
- 14, Abolishment of indirect taxes
- 15, Equal opportunities for education
- 16, Official regulation of the prices of the necessities of life
- 17, Abolition of paternalism

### **Economical**

- 1, Eight hour day
- 2, Labour insurances
- 3, Minimum wage
- 4, Factory management by Factory Committees
- 5, Recognition of the right of collective negotiations by labour and peasant unions with capitalisms, landlords and governments
- 6, Protection of women and under-aged workers
- 7, Public ownership of the means of communication and transportation

### **Agrarian**

- 1, Confiscation of large land properties without compensation
- 2, Setting up of the state reserved land
- 3, Improvement of tenant system
- 4, Public management of agrarian financing system

### **International**

- 1, Abolishment of imperialistic intervention

- 2, Withdraws of army from Korea
- 3, Relinquishment of colonies and their self determination
- 4, Recognition of Soviet Russia

This draft of program is the one worked out at the Japanese Bureau in Vladivostok in February 1924. It was agreed, at that time, between the said bureau and the Central Committee, of the Communist Party of Japan, to write two drafts separately, one in Japan and one at Vladivostok, and the former to be brought by delegates to the 5<sup>th</sup> Congress of the Comintern either to Vladivostok or Moscow. Then these two drafts are to be compared and studied, and to be made into one final draft to be presented to the 5<sup>th</sup> Congress. Since, however, the Central Committee draft has not yet arrived and in anticipation that it will come too late, we present this draft made at Vladivostok as a reference material.